

Klaus J. Mattheier, Haruo Nitta und Mitsuyo Ono (Hrsg.):  
 Methoden zur Erforschung  
 des Frühneuhochdeutschen

飯 嶋 一 泰

この論集は、1990年夏に本栖湖畔で行なわれた *Erstes deutsch-japanisches Kolloquium zur Frühneuhochdeutschforschung* の発表原稿をもとに編まれている。テーマは、初期新高ドイツ語の書記・音韻・形態・シンタクス・辞書編纂法など、多岐にわたる。

この論集の大きな特徴は、全12篇の論文のうち半数の6篇が日本の研究者によって執筆されていることである。ドイツ語史は、一般に古高・中高・初期新高・新高ドイツ語〔以下、Ahd., Mhd., Fnhd., Nhd. と略す〕の4つの時期に区分されるが、日本人ゲルマニストの活躍が近年特にめざましい分野がFnhd.である。彼らの業績がこのような形で、ドイツ本国をはじめ広く世界に紹介されるのは喜ばしい。

なお、評者は、Fnhd. に関しては全くの門外漢なので、収載論文の当該研究分野における位置づけに関しては判断することができない。したがって、小論は本来的な意味での「書評」ではあり得ないことをお断りしておく。また、紙数と時間の関係上、収載論文の全てを扱うことは不可能であった。これらの論文の題名は末尾に挙げてある。

巻頭論文は新田春夫氏の *Theoretisch-methodische Überlegungen zur Erforschung des Sprachwandels des Deutschen — vom sprachtypologischen Gesichtspunkt betrachtet* である。

第1章ではまず、SVO言語とSOV言語において、文中の語があたかも鏡像のように逆方向に並ぶことが指摘される。著者は、この根底に形態素の普遍的な配列規則を推測する。つまり、文法的形態素が語彙的形態素に先行する場合はSVO言語が成立し、逆の場合はSOV言語が成立するというのである。

次に、この仮説が、SVO言語と一応見なされるドイツ語と、典型的なSOV言語である日本語の例文により検討される。ドイツ語では、名詞に前置された文法的形態素が名詞をそれに先行する動詞につなぐ「鉤」となり、日本語では後置詞が名詞を後方の動詞につなぐ「鉤」となっていることなど興味深い言及がある。

第2章では、Mhd. から Nhd. にいたる間に生じたシンタクス上の変遷事項が列挙され、これによって、ドイツ語が一貫してSVO言語への道を歩んできたことが確認される。

第3章では、上記の変遷過程を具体的な資料に即して実証的に跡づける必要性が説かれる。著者自身はFnhd. 期の名詞句の変遷を扱う予定であるという。

分量的内容的に第1章にウェイトが置かれ、後の2章はスケッチの域を脱していない観がある。全体として、Fnhd. 研究というより、類型論的観点からの史的シンタクス研究序説といった性格の論考である。

Klaus J. Mattheier 氏の Proto-Orthographie. Überlegungen zum Verhältnis von Schriftzeichen und Lauten anhand von rheinfränkischen Texten は、公的な規範が成立する以前の時代における音と綴り字の間の規則性を探るものである。著者は、理論よりも研究作業上の実践を念頭に置き、14世紀末の寄贈証文の一部を具体的に分析しながら論を進めている。分析の手法としては、H. Penzl の *syngraphischer Vergleich* が適用される。これは同一資料において異なる綴り字による表記が見られる同一語形（たとえば *trochtsesz* と *drochtsesz*）を対比して、書記上の異形なのか、音の上での異形なのかを判定する作業である（この同一文献内での比較は、同一時代同一地域の諸文献をコーパスとする *diagraphischer Vergleich* に拡張されうる）。分析の際の *Bezugssystem* としては、先行する Mhd. の音素体系ではなく、原則として Nhd. の音素・書記素体系が用いられる。

実際のテキスト分析は、*Zeichenfeld-Analyse*, *orthographische und quasiorthographische Analyse*, *Lautanalyse* の3段階で行なわれる。これらの作業の詳細をここで紹介する余裕はないが、綴り字の区分の仕方、異形のリストアップの仕方、仮説の立て方などが、実例を通してわかりやすく解説されている。

*syngraphischer Vergleich* は分析対象を一文献に限定するために、サンプル数が不足する憾みがあるが、方法論的には最も潔癖な手法である。音素・書記素分析を志す者が立ち返るべき原点と言えよう。

Peter Wiesinger 氏の *Die frühneuhochdeutsche Graphemik des steirischen Dichtermönchs Andreas Kurzmann* は、シュタイアーマルクのシトー会修道士で詩人の Andreas Kurzmann († vor 1428/1431) の自筆による手書き文書の書記素体系を確定する試みである。

第1章では母音の書記素体系が検討される。ここでも、個々の分析結果にふれることは控えるが、書記習慣と音の乖離に注意を払いつつ慎重な作業が進められている。分析の *Bezugssystem* としては、Mattheier 氏の場合と異なり、標準的 Mhd. 体系が用いられるが、必要に応じてバイエルン語の特殊事情が考慮される。また、脚韻が場合により少なからぬ情報価値を提供する。全体として、Kurzmann の書記素体系は首尾一貫しており、自由な異形あるいは位置的な異形はわずかしか見られないことが確認される。この体系は、本質的に13世紀に確立されたバイエルン語の書記伝統に基づくものであるという。

第2章の子音書記素体系も、基本的に同じ手順で記述される。母音の場合と同様、バイエルン語の伝統に基づく安定した書記法が観察される。一方で、当時の話し言葉の音素体系が大幅に書記素体系に取り入れられている。

Mattheier 氏とは異なるアプローチであるが、書記素分析のモデルとして参考になる論文である。

小野光代氏の Graphemvarianten im Vokalismus 8 deutscher Urkunden des 13. Jahrhunderts aus dem Südmährischen Gebiet は、南モラヴィア地方の最初期(13世紀末)の8つの証文における母音書記素体系の研究である。

第0章では、資料についての説明の後で、Fnhd. 期には書記法に関する規範(Norm)こそ無かったものの一定の書記慣用(Schreibusus)が存在したという H. Moser の説が紹介される。また、第1章以降の分析結果を先取りする形で、調査資料においても個々の証文の中ではかなり厳格な規則が支配していることが指摘される。

第1章から第8章では、Mhd. の各種母音音素に対応する書記素の当該資料における分布が、表によって示されている。これらの表からは、確かに証文ごとの比較的安定した書記法的一端をうかがうことができる。ただ、資料の規模から致し方ないことではあるが、例証数が少なすぎるといふ印象は否めない(なお、ごく少数の例証、たとえば1例対2例といった分布の場合に、33.3%対66.7%のごとくパーセンテージを挙げるのは如何なものかと思う)。

0.1のMhd. 音素表にいくつか疑問があるが、少なくとも/a/と/â/は欠落しているのではないか。また、第2章で標題にあるMhd. /öu/を扱う節が見あたらない。これは/öu/に相当するものが資料に例証されていないということか、それとも単なる節の脱落なのか。このままでは釈然としない。さらに、3.1の末尾に In diesen Quellen kommen für /öe/ keine Belege vor. とあるが、/öe/という音素がMhd.にあったとは初耳である(なお、この音素は0.1の表には記載されていない)。

橋本聡氏の Zur Stabilität der schriftsprachlichen Norm im Wien des ausgehenden 17. Jahrhunderts. Analyse anhand zweier vom selben Autor stammenden Drucke も、言語規範ないし慣用の問題を扱う研究で、書記・音韻・形態の分野を対象としている。資料としては、手書き文書ではなく、17世紀末にウィーンで出版された2つの刊本を選定している。両刊本とも Johann Ernst von Jarnage (1648-1719) という司祭が書いた説教集で、テキストAは1685年、テキストBは1694年の刊行である。10年弱の年代差のある同一著者の作品の比較を通して、東中部ドイツ語をベースとする言語規範がウィーンで地歩を固めてゆく過程を検証しようという趣向である。

第1章では名詞の大文字書きが、第2章では mhd. /i/ および /ei/ の書記素 <ei> への一本化が、テキスト AB ともにほぼ完全に達成されていることが確認される。第3章では、Nhd. 長母音化を経た /i/ が A では大部分 <i> で表記されているのに対して、B では過半数が <ie> となっていることが示される。また、第4章では、B におけるウムラウト表示の増加が認められる。この2点に関しては、B における東中部ドイツ語の影響を想定することができる。以下、第9章まで様々な領域における両テキストの比較がなされ、その結果は区々であるが、総体としてAに比べBがより強い東中部ドイツ語的性格を有していると判定される。

文章語の標準化のプロセスが良くわかる明快な記述で、末尾の表も見やすい。例証数が

必ずしも首尾一貫して明示されていないが、これも一覧表などの形にまとめれば、当論文の資料的価値はなお高まったであろう。

Anne Betten 氏の *Norm und Spielraum im deutschen Satzbau. Eine diachronische Untersuchung* は、テキスト言語学の立場から中世・近世ドイツ語シンタクス研究の問題点を論じている。

第1章の前半では、中世・近世のテキストの分析に際して今日的な意味での「文」概念を適用することの是非が検討され、全体として否定的な結論が導き出される。後半では、この問題が最近の研究書でどのように扱われているかが点検される。その中で、著者は W. G. Admoni による論理的文法的文タイプ (*logisch-grammatische Satztypen*) に注目し、その解説に2ページ弱を費している。

第2章では、8—16世紀のドイツ語シンタクスの諸特徴が、先行研究を踏まえつつ論じられる。まず、中世における従属 (*Hypotaxe*) の位置づけに関する考察がなされる。すでに Ahd. 末期の Notker が高度な従属文を駆使しているにもかかわらず、近世にいたるまで「文のゆるやかな結合」が一般的であった原因を、著者はシンタクスにおける規範の寛容性、口語の影響などに求めている。次に、中世の文章語における口語の影響を示す一分野として、Ahd. の Tatian などに見られる *thô* (*dô*) による文接合にスポットが当てられる。H. Weinrich の浮き彫り理論 (*Relieftheorie*) を援用して、著者は *thô* が口語において情報の前景化 (*Vordergrundsetzung*) というテキスト構成上の機能を担っていたことを指摘する。

第3章では、Nhd. 期に入ってからからの規範の定着とそれに対する抵抗が、向心力と遠心力のように作用しあう様が素描される。

語史研究におけるテキスト言語学的アプローチに関する示唆に富む論説であるが、難をいえば総花的で、各章のつながりが今一つはっきりしない。

藤井明彦氏の *Haben Erfindung und Ausbildung des Buchdrucks zur Herausbildung der neuhochdeutschen Schriftsprache beigetragen?* は、表題通り、Nhd. 文章語の成立過程における印刷業者の役割を問う論考である。

最初の3章は方法論的序説で、主に E. Coseriu の説に拠りながら、ラングにおける規範 (*Norm*) と体系 (*System*) の2側面の区別が提唱される (ここで言う規範とは *präskriptiv* なものではなく、むしろ「慣用」に近い)。そして、この規範における変動が言語体系の変遷へと通じることが確認される。

第4章では、以上の前提を踏まえて、問題が具体的に検討される。著者は、Fnhd. 期が、言語内的には Nhd. 二重母音化が進行する時代であり、言語外的には印刷術が普及する時代であることに着目し、印刷業者がこの言語変化に如何に対処したかを問う。まず、V. Moser: *Frühneuhochdeutsche Grammatik I-1* の記述が図表にまとめられ、二重母音化が手写本よりも刊本に早く採用される傾向が確認される。次に、アウクスブルクの印刷業者 Günther Zainer の刊本に対する著者自身の調査により、二重母音化、単母音化、mhd. /ei/ の <ey, ei> による表記などが、オリジナルの自筆草稿を訂正する形で刊本に取り入れられ

ていることが判明する。これらの調査結果から、著者は印刷業者が言語規範の変化、ひいては言語構造の変化に寄与したと結論する。

第5章では、印刷業者をこの先駆的業績に駆り立てた要因が考察され、終章である第6章では印刷業者の言語に対する影響力の量的質的卓越性が指摘される。

社会史と密接に関連し、研究者の「傾向性」が発揮されやすいテーマであるだけに、第4章(特に後半)の言語資料に即した分析には説得力がある。

以下に、今回書評の対象としなかった論文の著者名と表題を挙げる。

Klaus Peter Wegera: Probleme bei der Ermittlung morphologischer Teilsysteme. Einige methodische Überlegungen.

中島和男: Flexionsmorphologische Untersuchung des Substantivs von Originalurkunden aus den Jahren 1300-1482.

工藤康弘: Zum Gebrauch von „wollen“ „sollen“ „werden“ in der Lutherbibel. Eine vorbereitende Arbeit zu den Modalverben.

N.N.Semenjuk: Zur Sprache der ältesten deutschen Zeitungen des XVII. Jahrhunderts: Syntaktische Textstruktur.

Oskar Reichmann: Möglichkeiten der Bedeutungsdifferenzierung im historischen Bedeutungswörterbuch.

全体として、本書はFnhd.を専門としない人間にとっても興味深く、示唆に富む論集である。収載論文の多くが一次文献(その大半は未だ公刊されていない手書き文書ないしは搖籃期本・古刊本である)を分析する着実な手法を取っているのも、好感が持たれる。それだけに、一部の論文にやや粗雑な記述が見られるのは残念に思われた。

Methoden zur Erforschung des Frühneuhochdeutschen. Studien des deutsch-japanischen Arbeitskreises für Frühneuhochdeutschforschung. Herausgegeben von Klaus J. Mattheier, Haruo Nitta und Mitsuyo Ono. München (iudicium) 1993. 198 S.